

90s生まれのアシスタント3人が



80sを追体験!

The Ladies of the 80s

主役は90年代生まれの編集アシスタントたち。つまり、当時彼女たちはこの世に誕生していませんでした。でも、だからこそ憧れが人一倍あるようです。「じゃあ、体験してみたら?」——そんな編集長のひと声で実現してしまった、80s追体験特集。お勉強して、ヘアメイクやファッションも変身し、街に繰り出してみました。彼女たちには80sはどう映ったのでしょうか?

Photos: Kohei Kanno, Cedric Diradourian, Tamon Matsuzono Cutout photos: Shinsuke Kojima, Daigo Nagao Stylist: Hiroko Oukuda (Buruzon Chiemi with B) Corporation: Keiko Moriwaki Editors: Maki Hashida, Yu Soga

Text: Yoshiko Yamamoto

教えて、先生! まずは3つの講義からSTART.

Lecture 01

ワーキングスタイル



PROFESSOR

田中康夫

1956年東京生まれ。作家。80年、『なんとなく、クリスタル』で文藝賞を受賞。95年の阪神・淡路大震災では積極的にボランティア活動。2000~06年長野県知事、07~12年参議院議員、衆議院議員。近著に『33年後のなんとなく、クリスタル』。翻訳にマイケル・ジャクソン自伝『ムーンウォーク』。

Q. 私たちから見ると、80年代の働く女性はパワーショルダーのスーツ姿というイメージがありますが、それが普通だったのでしょうか?

80年代の女性のファッションは多様でしたから、カチッとしたスーツを着た女性もいましたね。

それはファッションだけでなく、例えば外で食事をするときも、選択肢が多様になったのが80年代。現在もその延長線上にあります。80年代に入る頃から、その日の気分でデザイナーズブランドのシャツとリーバイスのデニムを組み合わせるようなスタイルが定着した。今なら、ヨーロッパの老舗ブランドとファストファッションを組み合わせるのもごく普通になりましたよね。

働き方に関しても同様で、86年に施行された男女雇用機会均等法により、四年制大学を卒業した女性が大手企業などに就職できる道が開けたのは事実ですが、それよりもむしろ職業や生き方の選択肢が広がったことのほうが重要だったと思います。

Q. では、バブル期の社会とは、どのようなものだったのでしょうか。

70年代末から80年代にかけては、戦後ひたすら量の拡大を目指した高度経済成長時代から高度消費社会へと移行し、人々が質の充実を求めるようになった時代です。

特に変化が大きかったのは流通です。欲しい人が、欲しいときに、欲しいものを欲しいだけ手に入れられる社会。バブルで最も恩恵を受けたのは不動産を持っていたおじさんたちで、それ以外——例えば大学生はさほど潤ってたわけではない。とはいえ、高度消費社会を生きるなかで、以前とは違って、服や食べ物や生き方の選択の幅が着実に広がっていく期待感を共有していたのだと思います。

その一方で、今ほどロボットやAIは実用化されていなかったものの、社会の歯車として自分たちが消費されていくのではという不安も生まれ始めていた。誰もが好きなものを選んでそれを手にする喜びを感じると同時に、なにがしかの人間性の回復という確かさを無意識の中で求めていたのです。単に快楽を得ようとしていたのではなく。

今でもパワーショルダーのスーツ姿の女性は、政治家や経営者、政府審議会の委員などに多いですね。実は彼女たちは「旧世代の価値観」に属していて、「男性優位な社会の中で闘い抜いてきたのが私だ」という肩肘張ったイデオロギーに生きていたのかな。そうした「成功体験」に憧れる読者もいるかもしれませんが、当ても大多数の女性は、もっとしなやかに自然体で生きていたと思います。その日の気分でパワーショルダーの服を着ていたとしてもね。

Q. 旧世代の価値観と、80年代の価値観はどう違っていたのですか?

どちらも人間の営みなのに、政治

とファッションは次元が違う、ブランド品の情報と文学の世界は違う、と二元論的にカテゴライズするのが古い価値観。数値化しやすい「形式知」をベースにしています。一方、80年代以降の価値観は私が小説のタイトルに使った「なんとなく」という表現が象徴するように、直観的な「暗黙知」に基づいている。お気に入りの服を着て、好みの料理を口にしながら恋愛も社会も同じ次元で語り合う感覚は、豊かさや儂(はかな)さが共存する80年代に広く共有されるようになりました。

政治や経済の指導者は、一例を挙げれば人口1億人という量の維持に躍起となっていますが、超少子・超高齢社会の日本は、右肩がりの量の拡大から発想を大転換して、質の充実や質の深化で確かさ・優しさ・美しさを求めていくべき。グラムというモードにからめて注目される80年代から学ぶべきは、「形式知」に惑わされがちな「目利き」よりも、「暗黙知」を捉える嗅覚の鋭い「鼻利き」の大切さだと思います。

Working Style



STUDENT MISAKI



1990年生まれの MISAKI は、小説のエディターを経て、VOGUE に転職。学生時代の同級生も、新卒入社から数年経ち、人生における仕事の意味を語り合うことも多い。今回は映画『ワーキング・ガール』のメラニー・グリフィスのような、働く女に変身!



〈右〉ウォール街を舞台に、働く女性を描いた映画『ワーキング・ガール』(88年)は、86年に男女雇用機会均等法が施行された日本でも話題に。〈中央〉パリコレデビューを機に、日本人デザイナーが世界から注目されたのも80年代。全身を黒でまとった“カラス族”と呼ばれる若者も。〈左〉パワーショルダーブームの火付け役は、ティエリー・ミュグレー。女性的なボディラインを強調したデザインが特徴的。